

タイ所伝『五十ジャータカ』中の スタダヌ・ジャータカ（二）

田 辺 和 子

〔過去世物語〕

〔後編〕 菩薩スタダヌ王子の教化

一・業報の果てに

菩薩は板につかまって浮きながら水の流れによつて海の中を漂^{ただよ}っていた。

チーラツパー妃も海の上を漂^{ただよ}いながら、ある岸に到着した。彼女は、そこから上がって一人歩きながら菩薩を
思い出して涙を抑えることが出来なくて泣きながら歌を歌った。

どのようにあの護つて下さる方に会えるのかしら。

あの方なしにどのように生きていけるのかしら。

あなたあの顔を私は見る事が出来ません。

命が無くなると私は思います。

いかなる行為によつてか、今、ここに 私の全ての業の報いがあります。

島の中で、行為の中で、私はなしました。

私は悲しみをなくすことはいたしません。

このように彼女は、泣きながら水で衣服を濡らして三つの指輪を指からとって衣服のすみに縛って右も左も知らずに行きながら、前方に一本の道を見て、その道を通って前進して二、三日でインダパッタの町に到着した。彼女は、町に入り自分の姿を変え、くずれたひどい顔になって町に入った。そこでは一人の、富をなくしてしまった大長者が、貧しい状態になって鉢を手に持って食べ物を探しながら命をつないでいた。彼女は、彼の家に行って、「旦那さん、お慈悲ですから私に住む場所をください」と言った。彼は、「奥さん、我々は貧乏になってしまった。どうしてあんたはここに住もうというのか」と言った。彼女は、「待って下さい。私はあなたが貧しいのを知っています。もしもあなたに差し支えがなければあなたのお慈悲をもって、ここに私の住む場所を得られますように」と言って、「よろしい、奥さん、あなたが望むように住みなさい」と言われた時、そこで住む場所を得てとどまった。

明るる日、自分の指輪一つを取って老人の元に行って、「ねえ、この指輪を売ってください」と言った。彼はそれを見て、下に上に調べて、「ああ、この指輪は、町全体程には価値がないようだ」と考えた。「ねえ、これに対して車に黄金と宝石を一杯にして四台分を取って来て下さい。」と言われた時、「わかりました、奥さん」と承知して、それを持って裕福な人々の所に行って売って、金の一杯詰まった四台の車を取って戻って来て彼女に与えた。

二、遊行者ホール建立

チーラツパー妃は、老人に車一台を与え、自分では三台を取った。それから五百金で召使い達、財と穀物、材木を買って、それから他のお金で大工の準備と遂行の為にホールの為の元手を前に置いて、「ねえ、これが完成した時にホールにこのようなあれとこれとの絵を描いてください」と、四辻の人の集まる所に色々な絵を描いたホールを造らせた。

彼女は、はじめから、ホールの中にはじめに先ず王が馬の背に乗って空中に飛び上がってゆくこと、そして菩薩が宮殿で部屋の入口を開けて入って観察する事と、吉祥のベッドに横になっていること、召使いのパドマーの背中に装飾の雌亀の姿等の様相、そして町からでたこと、ガンターラ夜叉のホールに入る等のこと、馬が夜叉と戦ったこと、それから出て、商人達とともに船に乗ってゆくこと、大海で船が沈みかかっている時、尖頂の頂上に居て飛び上がる事等、このようなことを始めとする絵画によってそれぞれの姿をえがかせて、そこに至った旅の沙門バラモン達の為に布施のつとめを設けてこのホールに入った旅の沙門バラモン達に食事を施して見せた後、誰かによって「これは誰による、誰のためのホールですか」と言われた時、『ウンマーダヤンティーによる遊行者の為のホールです』と言いなさい」と、このように召使い達にこの考えを示した。それ以来、「ウンマーダヤンティー遊行者ホール」として有名になった。

このように彼女は、菩薩の無事を知る為にそのホールを造らせて、「そのホールに入った誰か旅行中の沙門バラモン達に食事を与えて絵画を見て話す彼等の話を確定して私に教えてくれるように」と言って、彼らにいつも布施の徳行を与えた。

三、スタダヌ王子、従妹のカレーヌヴァティーに巡り合う

一方、菩薩は、大海で板につかまって浮きながら、次第にアンジャナヴァティーの岸に到達した。それから上がったチーラツパバーを思い出しながら、目は流す涙で一杯になって、そこで芭蕉の森に入って、横になった。

その時、アンジャナヴァティーという夜叉がカレーヌヴァティーに言った。「カレーヌヴァティーよ、川岸に行つて、私の沐浴の水を取つてきなさい」と言った。彼女は、十六人の王女達を呼ばせて前にして自分では後ろからゆつくりした足取りで川岸に行つた。菩薩もまた彼女を見て認めて、全ての彼女達が最初に沐浴して水を取つて行く時に、芭蕉の森から出て、（彼女達）全ての後から行こうとするカレーヌヴァティーを呼んだ。「ねえ、カレーヌヴァティーよ」と言った。その声を聞いて、彼女はあちこちを見て菩薩を認めて「あなたはどなたですか」と言った。こう言つて、彼の元に行つて「一体あなたは、誰ですか」と尋ねて、「一体私の名前を知らないのですか」と言われた時に、「私は存じません。旦那様」と言つた。菩薩は、彼女に、「私は、スタダヌという名前です」と名前を告げて、「どうしてここにこられたのですか」と尋ねられて彼女に、次々と、はじめからやってきたことを語つた。それを聞いて彼女はシクシクと泣き出した。それから菩薩は、「王女よ、先ず他の人々に、私がここにやってきたことを伝えないうで下さい」と言つた。その後、十六の方法でカレーヌヴァティーという名の王女と内通した。即ち、束髪や耳、頭、額、眉毛の顔、鼻、あごと首、乳房、子宮と腹、へそと脇、秘密というようにこれらの十六種のやり方で愛欲のなすままに彼女と情を通じた。彼女も笑いと愛情によつて菩薩に愛の言葉をかけながら、「旦那様、ここに居て下さい。誰にもお姿を見せないでください」と。彼は「わかつた」と承知してそこに横になった。

四、スタダヌ王子、夜叉女に魅入られる

その時、彼女は水を運んで彼女達の後に行った。彼女が宮殿に入ろうとした時に、人間のおいが匂った。その時、アンジャナヴァティーは、彼女達に尋ねた。「人間のおいが匂ったね。誰がここにやってきたのかしら」と。彼らも、「奥様、おりません」と言つて、「どこからここに人間の匂いが入ったのか」と彼女が言つた時に、二度も三度も尋ねられて「奥様おりません」と言つた。あくる日、水汲みの時に彼女達皆が一緒になってカレーヌヴァティーに言つた。「ねえ、友よ」と。「カレーヌヴァティーよ、あなたが入つて来た時に、この匂いがあつたのです。私達はあなたを疑っています。それでももしあなたが正直に話さないなら、我々すべてはあなたの頭上に業因がおちるのを知ることになると思うわ。アンジャナヴァティー夜叉奥様にあなたの罪を知らせますよ」と。彼女は、「もしもあなたがたが誰にも話さないなら、あるがままに事柄を話しましょう」と言つた。「私達は他の人々には話しません。先ず話さない」と言つた時、「それではあなた方にあるがままにお話します」と言つた。彼女は、「よろしい、友よ、話さない」と言つている彼女達に、菩薩がやつてきた事を述べつつ、このように言つた。「私の兄が此処にやつて来て住んでいるのです」と。「お兄様は何と言うお名前ですか」と。「スタダヌ王子という名前です」と。「あなたが話していることは、本当のことですか」と。「皆様本当の事です」と言つた時、彼女達皆が、「あなたのお兄さんはどのような方ですか、彼の姿はどのようなですか」と尋ねた。そこで彼女は、菩薩を褒め称えながら言つた。「皆様方、あの方は誰かと等しいという方ではありません。最上のお方、素晴らしい優美さを備えておられる方で、百の舌、千の舌でも彼の力と威力と勇猛さと光を備えている優美な姿を得ている事を褒め称える事は出来ません。どうして私が私の一つだけの舌だけでほめる事ができましようか」と。

彼がここに来ている事を聞いて、彼女達皆も欲の種によって欲一色になり、菩薩のもとに行つて、立っていた。その時菩薩は、彼女達とも友の親交を行つた。彼女達皆は、親交によって菩薩を氣に入つて褒めながら水瓶を取つて立ち去つた。彼女達が宮殿に入る時にも同じように宮殿の中で人間の匂いがした。その時アンジャナヴァティーは、匂いを嗅いでこう言つた。「どうしてあなた方が入つて来た時に、人間の香りがしたのかしら。本当の事を私達にあなた方は言つていないわ。こんな時に、あなた方がもしもあるがままのことを話さないなら、あなた方の命はありませんよ」と脅した。そこで彼女達は、死を怖れて隠す事が出来ず、恐怖のない事を求めて告げながらこう言つた。「奥様、スタダヌという名のバーラーナシーの王子で、カレーヌヴァティーの兄上がここにやつてきたのです」と。

彼女は、スタダヌという言葉だけを聞いて心の中に生じた喜悦から、不死の水が沁みわたつたようになって考えた。「もしも王子が賢いなら、確かにこの徴きざしによつて私の思いを知るだろう」と、自分の指で手紙を書いてカレーヌヴァティーの手に置いてこう言つた。「もしも彼が賢いなら、この意味を知る筈。彼がここに来るように。もしも認めないなら、彼は私の餌食になるわよ」と言つて渡した。カレーヌヴァティーは、この手紙を取つて、泣きながら菩薩の元に行つて挨拶をして手紙を渡した。「王子よ、もしも手紙の中に於けるこの思いを認めるなら、あなたの命は助かります。もしも認めないなら、あなたに命はありません」と言つた。菩薩はそれを見て、この夜叉女は自分に貪りへの欲で心が縛り付けられていたとわかつた。菩薩は、「私はそれを知っているよ。カレーヌヴァティーよ」と言つて、アンジャナヴァティーの手紙に自分の姿を書いて抱いてカレーヌヴァティーの手に置いて遣わした。彼女はそれを取つて、かの夜叉女の手に渡した。夜叉女は、それを見て、毛を逆立て、体が五色の喜びに触れられて、これはかなえられたと考えて、心躍りに躍りあがつて、飾り付けられた装身具と花と香の塗香を取つて、カレーヌヴァティー

の手に置いて遣わした。かのカレーヌヴァティーは行つて、菩薩に与えてこう言つた。「旦那様、これらがアンジャナヴァアティーからあなたに送られたものです。」と。それを聞いて菩薩は、「今行かなければならない」と、沐浴し、身を飾つて急がず、ゆつくりした様相で自分の自然さで優雅に歩く若いライオンのようにあくびをする帝釈天のように婦人達の群れに囲まれて宮殿に登つた。

なお、アンジャナヴァアティーもまた風窓を開けて彼のやってくるのを待ちわびながら、やってくる菩薩を見て、「ああ、あの王子がやってくるわ」と満足して菩薩に呼びかけながら、言つた。「早く、お入りください。大士（菩薩）よ。」と。その時、大士は、彼女の手を取り抱き寄せて彼女と楽しみ合つた。それから、立ち上がつて、かのアンジャナヴァアティーは菩薩を激しく愛した。

五、スタダヌ王子、馬のマニカツカと再会す

このように時が過ぎた時、ある日菩薩は母を思い出してどんな方法で私は行つて母に会えるだろうかと考えてカレーヌヴァアティーに言つた。「ねえ、カレーヌヴァアティーよ。この地に馬がいるそうだね」と。「王様、います」と。「どのようにそれを手に入れる事ができるかね」彼女は言つた。「王様、その主人を好きになります」と。「立ち止まっているところでも、座っているところでも、歩いてるところでも、そこであなたに対して称賛をなすのです」と。「それによつて近くの馬達は、それでどんな方法でも手に入れる事が出来ます」と。「それが方法です」と。

また或る日、大士（菩薩）は、朝早く母を思い出しながら泣いた。その時、かの女夜叉は、目が覚めて尋ねた。「どうして泣いているの」と。彼は、だまつていた。このように二回目も、三回目も尋ねられて、こう言つた。「妻よ、

私は、以前にバーラーナシーに住んでいた。象や馬と遊んでいたのだよ。今はそれらを私は見ません。それで私は泣いているのです。妻よ。もしもあなたに私に対する愛情があるなら、兄弟の馬を求めさせてくれないか。またもしも私がそれを得られないなら、私の命はないと思うよ」と。アンジャナヴァティーは、「そのようなあなたは、心配しないで下さい。私がそれを求めさせましょう」と言つて、あくる日、それを求める為に、カレーヌヴァティーに命じて言った。「ねえ、カレーヌヴァティーよ、そなたは、行つて私の兄の馬を求めなさい」と。「わかりました。奥様」と、夜叉の近くに行つて、挨拶してそのことを告げた。それを聞いて夜叉はカレーヌヴァティーに言った。「そんなことを言うな。カツカラは、いなないている。捕まえてみろ。お前の命はないぞ。行け。妹にこう告げよ」と。彼女は行つてアンジャナヴァティーに告げた。彼女も菩薩に告げた。それを聞いて菩薩は、再びまた泣いた。かのアンジャナヴァティーは、それを耐えられずカレーヌヴァティーに言った。「おそれないで。カレーヌヴァティーよ、行つて、あれは私の馬なのよ。私の兄によつて長い間縛られているの。今や静まつて粗暴ではないでしょう。行つて、連れてきなさい」と。また、彼女は夜叉の元に行つてそのことを告げた。夜叉は「それなら連れていけ」と言った。カレーヌヴァティーは、馬の所に行つて馬に言った。「ねえ、マニカツカよ、あなたの主人スタダヌ王子がここにやつてきたのよ」と。それを聞くと、馬は私の主人がここにいるのだと考えて涙を一杯目にため、「私の主^{あるじ}に今日会えるようだ」と心満足して大いに笑いに笑つた。

また、彼女は縄を解いてその馬を連れて宮殿の前に置いてガンターラ夜叉に挨拶して立つた。彼もまたそれを見てカレーヌヴァティーに言った。「お前はどのようにこれを捕まえさせるのか。」と。「王様、あなたの妹さまの力によつてです」と。彼は言った。「妹も呪力を知っていると思う。」と。彼女は、「そうではありません。王様、あな

たのお力によってです。」と言った。菩薩の近くに連れて行つて示した。

菩薩も馬を見て、涙で一杯になった目で彼を見た。馬も菩薩を見て、涙を流し乍ら菩薩に尋ねた。「大王様、太子妃はどこにおられるのですか。」と。「マニカッカよ、私は、妃がどこにいるのか知る事ができないのだよ。」と。こう言う馬は、彼を安心させて言った。「大王よ、このような状態でここに長く住んではいけません。」と。菩薩は、「そのようなあればいいが。」と言った後、そこでわずかな日々を過ごした後、或る日アンジャナヴァティーに言った。「妻よ、庭園で酒と飲物の大宴会をしよう。どうしてか。私は言うよ。何故なら、この馬を私は手に入れた。大勝利の飲物を飲め。」と。彼女は彼を信じて、多くの矢を用意して、召使い達によって持たせて庭園に行つて、酒を飲んだ。アンジャナヴァティーをはじめとする彼女達全てが、酔酒に酔っぱらつて、正氣を失つて宮殿に入つて、深い眠りに入つた。

六、スタダヌ王子、チーラツパバーと再会す

その時、菩薩はカレーヌヴァティーに言った。「案ずるな、カレーヌヴァティーよ。今、すぐに馬を連れだそう。」と言つた。こう言つた後、彼は馬に乗つて空中に飛び出して次々と進んでインダパッタの都についた。またその町に入りながら、バラモンに身をやつして、「マニカッカよ、お前はここにいなさい。私は、町でチーラツパバーを探そうと思う。」と言つた。都の外に馬を置いて自ら都の中に入つて人々に尋ねた。「どこかの場所に賢者達や沙門バラモン達が一か所に集まっていますか。」と。彼等は言つた。「おい、婆羅門よ、一人の女性の遍歴者が非常に美しいこれこれの場所にウンマーダヤンティーという名のこの庵をつくらせたのです。そこに多くの賢者達、沙門婆羅門達が

集まっているよ。」と。菩薩は、彼等が示した道を行ってそこに入って最初に來た沙門婆羅門達と記憶すべき話をかわした。

その時、庵では、召使い達は彼が入る時に新しくやってきた、若い婆羅門に庵の外で食事を与えて、「大婆羅門よ、この庵に入って來た沙門婆羅門にはつとめがあることを知らなければなりませんよ。」と。「一体それはどんなものか。」と。「この庵に入るそれぞれの沙門婆羅門はそこにある色のついた絵の姿を見るのです。これが彼等のつとめなのです。」と。「さあ、あなたは絵に書かれた姿をみるべきです。」と。こう言われて、菩薩は庵に入って、それぞれの絵に書かれた姿を見て、はじめに先ず、自分自身の宮殿に入っている姿を見て笑った。それから前に行つて、チーラツパバーがパドマーの体の真ん中をつかむのを見て、大いに笑った。さらに進んで町から出て以來、ガンターラ夜叉の庵に入る迄それぞれの絵の姿を見て、「ああつらい」と、苦しい顔になった。さらに進んで大海の岸辺のダジャバンダナ樹の根元に座る絵の姿を見て涙を流した。さらに見ながら大海で船の尖頂の先端から飛び上がった時の絵の妃と一緒に自分の姿を見た。そして一緒に結び布の真ん中で切れてしまった姿を見て、大きな声を上げた。その時、彼女の召使い達は、笑ったり泣いたりする彼を見て、妃の元に行き、「お妃様、一人の若い婆羅門が庵の彩色の姿を見て、このような様子をしました。」と告げた。その瞬間、彼女は窓を開けて、菩薩だと認めて自分をおさえられず、涙を流しながら高樓からおりて、その菩薩がいるところに近づいた。近づいて菩薩の足元にくずれて種々の方法でしゃべりながらこの歌を歌った。

私の心は冷たかった。今、愁は火によつて熱せられた。

何故なら、主人を見て、王よ、私は悲しみからのがれています。と。

菩薩も多くの方法で愛の言葉で彼女とともに語った。その時、全町民達は「この方がスタダヌというのだそうだ。」と、菩薩を囲んで揺さぶった。（その地の）マハーパナーラダ王も菩薩に「王子よ、私達の王国にて教誡して下さい。」と言って、このように菩薩に王国を分与した。菩薩も又、それを拒んでそこで二、三日とどまって、マハーパナーラダ王達に願ひ出て多くの人々を教誡して王妃と共に多くの品物を持って馬に乗って次第にバーラーナシーの都に到着した。

菩薩の母は、行ってしまった時以来昼も夜もいつも目に涙をためて、菩薩を待ちながらいつも宮殿の入口で立っていた。菩薩もやって来て空中から降りて妃と共に母の足元で挨拶して泣いた。また、彼女は彼を抱いて、頭に口づけして「ねえ、そなたが行ってしまったて以来、私は歩く時も、立ち止まっている時も、座っている時もいつも目から涙があふれてながれていたのよ。今、そなたが帰って来て以来、悲しみが消え、目の涙が消え、私は顔が明るくなり、うるわしくなるでしょう」と言って、息子とともに楽しい話をした後、その宮殿を離れた。また、町の人々は、叫び声とともに太鼓、小鼓、法螺貝等の全ての楽器をならして王妃と共に宝座に座らせて灌頂した。

七. スタダヌ王子、夜叉の元に行き、五戒の教えを説く

それから後に、菩薩はアンジャナヴァティーとカレーヌヴァティーを思い出しながらマニカツカに乗って、次々とガンターラ夜叉の領域に至って宮殿から前方の空中に立って、ガンターラ夜叉に言った。「友よ、大夜叉よ、アンジャナヴァティーという名の私の妻を与えて下さい。もしもあなたが彼女を私にくれなければ、その時、あなたに大きな悪い事がおこるでしょう。」と。

これを聞いて夜叉は、妹のもとに行つて尋ねた。「スタダヌ王子がお前の夫だというのは本当か。」と。「その通り、本当です。お兄さん。」と。夜叉は、彼女を信じて菩薩に対して喜んで、彼の近くに行つて、「ねえ、偉大な人よ、私は今、あなたに妹を与えよう。」と言った。その時、菩薩は喜んで、「今、この者は夜叉である。私は、また彼に五戒をまもらせなければならない。必ず彼は、私の教誡に基づいて五戒を保つて天界に生まれるであろう。」と考えて、空中から降りて、彼と一緒にアンジャナヴァティーの宮殿に入った。それから夜叉は、自分の住居で会衆を集めて、菩薩の為に大いなる恭敬をなして自分の妹を与えた。

菩薩もまた、アンジャナヴァティーを得て夜叉にこう言った。「ねえ、大夜叉よ、あなたは、以前に慢心している人間となつていたのです。その者は、体で悪い行いをし、言葉で悪い行いをし、心でも、悪い行いをしたのです。この恐ろしい行為を保つ事によつて今、夜叉の胎内に生まれて残酷で粗暴になつてゐるのです。今、これよりあなたは三つの善行を行いなさい。五戒を守りなさい。五戒とは何か。生き物を殺さないこと、与えられないものを取らないこと、諸欲に於ける邪行を行わないこと、妄語（虚言）をしないこと、穀酒、果酒、酒、放逸処から離れることというこれらを五戒というのです。

① 生き物を殺す者の苦しみ

実に殺生したものは、夜叉よ、それによつて実行され、修せられ、多くなされて、彼に苦しみの感覚器官があり、苦しみの結果があり、嫌で不快で、失敗に導くものがあり、もしも彼がそこから、死んで、ここにやつてきてそこそこで後に死んで生まれ彼には多くの苦しみがあ、多くの怨みがあり、多病となり、短命になる。彼は、短命になるのです。即ちこれが、殺生なのだよ。

②与えられていないものを奪う者に起こる災い

与えられていないものを奪う人も、夜叉よ、そこから死んでここにやってきて、そこそこで後に生まれ、多くの苦しみを得、多くの苦果を得、貧困で、貧乏で、食べ物と飲物に不足し、財物に対して王から、あるいは、泥棒から、火災から、水難から、悪鬼から、敵等から災いが起こる。夜叉よ、この貧困に至る事が、即ち与えられないものを奪う事というのだよ。

③愛欲に於ける過ちの行い

愛欲に於ける過ちの行いとは、夜叉よ、誰かによってこのように親しまれ、慣れ慣れしくされ、多くなされたその人の苦の結果を伴う苦しみの感官は、いやで、不快で、危険に至らせられるであろう。もしもそこから死んでここにやって来てそこそ後に生まれ、容色悪く美しくなくなり、極悪の見栄えの状態を犯すようになるなら、それは、醜さに導くのだよ。即ちこれが愛欲に於ける過ちの交わりの行為である。

④嘘をつく者の苦しみ

嘘をつく事は、誰かによってこのように親しまれ、慣れ慣れしくされ、多くなされたその人の苦の結果を伴う苦しみの感官は、いやで、不快で、危険に至らせられ、地獄に導くものであろう。もしもそこから死んでここにやって来てそこそ後に生まれ、この言葉でこれがうそつきになるだろうかというなら、彼は、悪臭のある顔等になるだろう。即ちこれがうそつきである。

⑤飲酒、放逸の者の苦しい報い

穀酒と果酒、酒、放逸処は、夜叉よ、誰かによってこのように親しまれ、慣れ慣れしくされ、多くなされたその

人の苦の結果を伴う苦しみの感官は、いやで、不快で、危険に至らせられ、地獄に導くものである。もしそこから死んでここにやって来てそこで後に生まれ、愚鈍となり、狂人の部類となり、聾啞の状態になり、ことばをそなえず、失念している。このように、夜叉よ、愚鈍等になるでしょう。即ちこれが、穀酒と果酒、酒、放逸処なのです。これらが、もっぱら嫌な結果を起こし苦報をもたらし、五つの怨みである。

① 殺生を離れる者の功德

五戒には、どんな結果があり、どんな功德があるか。ここに、また、ある信心深い男が、哀れみ深く有情に対して憐憫を持ち、殺生をやめて、殺生を離れて、全ての生き物達に対して鞭を捨て、刀を捨てて、彼は戒を具えて体が壊れて死から他の善趣である天界に生まれるでしょう。もしもそうでなければ生まれないでしょう。もしも彼が、そこから死んでここにやって来てそこそこ以後で生まれ長寿となり、怨み事がなく、多くの友に恵まれ、多くの仲間があり、人天たちに愛される心となる。彼等は、天に近くなり、長寿になり、天の状態に近くなる。これが即ち殺生を離れることであろう。

② 与えられないものを盗らない者の功德

ここである信心深い男が、偷盗と称される与えられないものを盗らず、与えられないものを盗ることから離れている人は、戒を得、受戒し受戒者となる。彼は体が破壊してからさらに死後、善趣、天界に生まれるでしょう。そうでなければ生まれない。もしもそこから死んでここにやってきて、どこへでも後に生まれて、彼は、大財産者となり、大金持ちになり、一体彼の財産の破壊は、どこからやってくるのか、王から、盗賊から、火事から、水から、嫌なものから、後継者から、このようにこれ等は、有情を導き、大財産等に導くようになる、これが即ち、与えられ

いものから盗る事から離れる事である。

③ 愛欲に対する邪行から離れている者の功德

ここである信心深い男が、悪からの慚愧を具え、愛欲に対して禍いを見、愛欲に対する邪行を捨てて愛欲に対する邪行から離れている。彼はこのように戒を得、受戒し、彼は体が破壊してからさらに死後、善趣に天界に生まれるでしょう。そうでなければ生まれません。もしも彼はそこから死んでここにやってきて、どこへでも後に生まれて、麗しく、みめよく、清らかで、最高の蓮華のようにうつくしさを具えていて、全ての人に愛される感覚器官に満ちる、そしてこのようにこれは、天に導き、妙齡さの状態に導くようになる。これが即ち、愛欲に対する邪行から離れる事である。

④ 妄語から離れる者の功德

ここである信心深い男が、妄語を捨て、妄語から離れ、真実を語り、真論者となり、他の人々の意趣を叱責し、信じられるべき論議をもって生活している。彼はこのように戒を得、受戒し、彼は体が破壊してからさらに死後、天界に生まれるでしょう。そうでなければ生まれません。もしも彼はそこから死んでここにやってきて、どこへでも後に生まれて、蓮の香りのような香りが彼の口から香り、よく栄えた意趣をもち、よい舌をそなえ、全部そろっている優れた歯をもち、はっきりした言葉を発し、必要に応じてふさわしい言葉が飛び出し、他の人々の為に信頼される言葉を語る。これは誰の言葉かと言われた時、これは、ここでこの彼の言葉が彼によって語られているのだと聞いて、その言葉は真実であると、言われるべきことに値する。このように彼は、天に転生し、よい香りの顔等の状態に転生する。すなわちこれが、妄語から離れることである。

⑤ 飲酒、放逸な所から離れる者の功德

ここである信心深い男が、穀酒と果酒、酒、放逸な処を捨てて、穀酒と果酒、酒、放逸な処から離れており、一切の事柄に信心深く、善人で、自覚があり、不放逸に生活をしていた。彼は、時々賢人達の中の如法の修行者や婆羅門達のもとに行つて、尊敬してこう尋ねる。「尊者よ、何が呵責さるべきもののたちの罪過であるか、何が親近さるべきか、何が親近すべきでないのか」と。彼はこのように戒を得、受戒者となつた。彼は体が破壊してからさらに死後、善趣、天界に生まれるでしょう。そうでなければ生まれません。もしも彼はそこから死んでここにやつてきて、どこへでも後に生まれて、彼は、このように人間となり、幸福で智慧があり、第六識を備える智慧をそなえ、明瞭な言葉を語り、ふさわしいことが口から出る。このように彼は天に生まれ、智慧をそなえた状態に生まれる。これが穀酒と果酒、酒、放逸処から離れることである」と。このようにこれが戒の功德である。

このように偉大な人は、彼の為に戒の功德を説き、またそれをほめながら、この偈をとなえた。

戒は、すぐれた装身具である。戒は、最上の行路の糧食である。

戒は、有益なことに覆われている。戒は諸仏の親近処である。

夜叉も偉大な人の法話を聞いて、さらに一層、適量に喜び、彼に称賛をしながら言った。「実に愚かな私の為に法の説示を示したのであるから、私の善い利養の為に実に私の為によくなされた。例えば道の巧みが道に迷うものの為に道を述べるように、このように私の為に多くの方法で法が示された」と。

このように偉大な人は、角を伐られた雄牛のように、牙を引き抜かれた蛇のように、ガンターラ夜叉を調御し無毒にして五戒に立脚させて、アンジャナヴァティーとカレーヌヴァティーを連れて、その後バーラーナシーの都に向

かい到着して、領土の地に置いた。マニカツカにも五十万金の施しによって大いなる恭敬を行った。それ以来、安樂な王位を享受して正しい法によって王国を治めて、命の終わりに天界に赴いた。

【結び】

師は、この法話を語って本生を結びつけられた。「比丘らよ、その時のブラフマダッタが、即ちかのストドーダナ王であつた。ケーシニーという名の王妃がマハーマーヤー王妃で、セータ王がマハーモッガラーナであり、帝釈天がアヌルッダで、マハーパナード王がサーリプッタであつた。パドマガツバー王妃が、ゴータミーで、チーラツパバー王妃がヤソダーラであつた。背中の曲がつたパドゥマーは、ウツパラヴァンナー比丘尼で、マニカツカがカントカ馬であつた。アンジャナヴァティー夜叉女はチャンドテリー比丘尼で、カレーヌヴァティーはスンドアリー比丘尼で、カンタラ夜叉はカーラーヴィリヤカであつた。スタダヌ王は、世界の主、正等覺者である。このように本生を伝えなさい。スタダヌジャータカが語り終えられた。